

過剰適応傾向とメンタライジング能力が 心身症傾向に及ぼす影響

山 田 多恵子

メンタライジングとは、自己や他者の行動の背後にある精神状態に注意を向け、それを認識することとして定義されている。本研究では、過剰適応傾向、情動（感情）のメンタライジングという身体化に影響すると考えられる2つの特徴が、心身症傾向にどのように影響するのかを明らかにすることを目的とした。その際、心身症傾向は、心身症の個人に多いとされる身体的愁訴として扱った。上記の3つの要因の測定のため、それぞれ成人用過剰適応傾向尺度（水澤，2014）、メンタライズされた感情認識尺度日本語版（高須，2019，未公開）、身体感覚増幅尺度日本語版（中尾・熊野・久保木・Barsky，2001）を使用し、感情（情動）のメンタライジングが過剰適応傾向を媒介して身体的愁訴に及ぼす影響を、共分散構造分析によるパス解析を用いて検討した。なお、調査の対象は、大阪府内の大学に所属する学生計223名（男性 153名，女性 70名）であった。分析の結果、情動（感情）のメンタライジングの各側面のうち、「感情の調節」は過剰適応傾向の「多大な評価希求」を媒介して間接的に身体的愁訴に影響すること、「感情の表出不全」は直接的に身体的愁訴に影響すること、また「感情の理解」は身体的愁訴に影響しないことが示された。以上から、情動（感情）のメンタライジングができると過剰適応傾向の「多大な評価希求」を低減（増大）させ、「多大な評価希求」が低減（増大）すると身体的愁訴が低減（増大）するモデルが明らかとなった。また、アレキシサイミアにみられるように、感情を表出したり同定したりすることの困難さが心身症傾向につながるメカニズムのあることが、可能性として示唆された。